メキシコにヤクルトを定着

――日系社会への貢献

地球の反対側で日系人が活躍。

International Career Development ㈱
CEO 横山 和子

ブラジル在住ジャーナリスト
大浦 智子

ヤクルトはメキシコブランド？

メキシコ人留学生が日本のコンビニでヤクルトを見て「メキシコの飲料がここに！」と驚き、のちにヤクルトが日本発のブランドだと知ってさらに驚いたという。ヤクルトは日本を含めた世界40の国と地域で事業展開している。

多くの人々に「メキシコ企業の商品」と認知されるほど地域に根差したビジネスを展開するメキシコヤクルト株式会社は、1981年にヤクルト本社とメキシコ側の３人の共同代表（春日カルロス氏、佐藤アキラ氏、平田ペドロ氏）の共同出資で創業された。その初代社長に就いたのが日系メキシコ人２世、当時44歳の春日カルロス氏であった。

春日カルロス氏

カラフルな浮き輪

カルロス氏の父親は長野県出身。養蚕業が盛んだった同県では、1929年の世界恐慌で生糸の価格が暴落、多くの農家が困窮する中で、20歳の彼は新天地に活路を求めた。当初は姉が移住していた米国を目指したが、1924年に施行された排日移民法のために諦め、1930年にメキシコに移住した。当時は満州などへ渡る人も多い時代だったが、彼は同郷の女性を呼び寄せ、かの地で家庭を築いた。

家族は地方で農業に従事した後、雑貨店を開業したが、真珠湾攻撃の影響で一家はメキシコシティに強制移住させられた。第二次世界大戦後は、メキシコシティに留まり菓子店を開業。息子のカルロス氏は、メキシコシティの高校を卒業し、会計士の資格を取得した後、1956年、18歳の時に日本語を学ぶため上智大学に私費留学した。ある時、東京の見本市でカラフルな浮き輪を初めて見た。当時のメキシコでは、海水浴には自動車のタイヤのチューブを使っていた。カルロス氏は父親に浮き輪のことを伝えると、父親は息子に大学を辞め、東京の下町にある浮き輪製造会社で機械の運転やメンテナンスの技術を習得するよう命じた。カルロス氏は日本の若者と一緒に会社の寮で生活し、近所の銭湯に通い、日本の文化を学んだ。さらに、社長が毎日早朝から出社し、社員が来る前に工場内外の敷地を掃除するなど、人一倍働いている姿を目の当たりにして、日本におけるビジネスの基本や経営慣行を深く学んだ。

父親はメキシコシティで浮き輪の製造会社「Industrias KAY」を創業し、同社はのちにメキシコで大手の玩具メーカーに発展する。カルロス氏は日本的経営を実践しながら父親の事業を助けた。当初13人だった従業員は600人を超えた。1968年に開催されたメキシコオリンピックの開会式では、KAYの５色の巨大浮き輪が競技会場の空を舞い、同社の知名度はさら